

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
豊かな心で 勸興魂の実現をめざす 子どもの育成 勸興魂 ～勉強はベストをつくし、運動はくたくたになるまで～	①学力向上の推進 ・分かる授業の実践 ・指導方法、形態の工夫・改善 ・基礎・基本の定着 ・課題解決型学習の推進 ・体験活動の充実 ・家庭学習の充実 ・学習規律の確立 ②豊かな心の育成 ・基本的生活習慣の確立 ・支持的風土にもとづく学級経営 ・道徳の時間と体験活動を関連付けた授業の実施 ・ボランティア活動の推進 ③特別支援教育の充実 ・個に応じた指導の充実 ・「自己尊厳感」の醸成 ・「自己有用感」の醸成 ・自他尊重の精神の育成 ・特別支援学級の活用 ・通級指導教室の活用

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 学力向上の推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	・学級・学年経営力、授業力の向上	・学級経営案並びに複数担任経営案を策定する。 ・全ての教職員が年1回以上、指導案に基づいた研究授業・公開授業を行い、個々の授業力及び学校全体の教育力を高める。	・PTA総会までに学級経営案及び複数担任経営案をもとに、各学級各学年の1年間の指導方針を確認する。 ・校内研修の年間計画に全職員の研究授業を位置づけ実践する。また、随時公開授業を行う。	A	・1年間を通して、複数担任による指導を行い確認した。 ・同学年の担任が協力し学年全体に目を配りながら学習や生活の指導を行うことができた。 ・体育科の授業実践では全ての教員が校内研究のテーマに基づいて指導案を作成し、研究授業を実施、事後の研究会を設けて授業力の向上に努めた。また、佐賀市人権・同和教育研究会の授業実践交流会に向けて研究授業を行うことができた	・同学年の担任が交換授業や合同授業を実施し、協力体制の中、学年全体に目を配りながら、各学級における支持的風土づくりに努めてきた。学習カードをもとに、自らの学びをふり返り、さらに、児童同士でアドバイスをし合う学びが成立する学級集団づくりに取り組んでいきたい。 ・全国学校体育授業研究会に向けて引き続き全員が体育の授業を公開し、授業改善に向け努力していく。教材研究を深めながら授業の質を高めていく必要がある。
教育活動	●学力の向上	・基礎・基本となる学力の定着及び思考力・活用力の向上	・全国並びに県の学習状況調査で明らかになった課題の解決を図り、前年度の結果を上回る。 ・体育科と算数科を中心に思考力・表現力を高める。 ・学校図書館の貸出を低学年130冊以上、中学年130冊以上、高学年100冊以上を80%以上の児童が達成できる。	・研究主任、副主任、各教科の主任を中心に課題分析にあたり、具体的な指導改善を策定し、実践化を行う。 ・月曜日の朝、4・5・6年生に「すくすくテスト」を行い、火曜日の放課後「すくすくタイム」で基礎・基本の補充指導を行う。 ・金曜日の朝の時間にチャレンジタイムを設け、算数科における基礎・基本の定着を図る。 ・学習カードやノート指導、発問・板書計画について、指導・実践を継続し、定着へと結び付けていく。 ・図書館の利用を位置づけたし、読み聞かせの機会を設けたりする。	A	・体育について講師の方をお呼びし、体育の理論についてや指導法について理解を深めることができた。 ・職員全員で体育の研究授業に取り組み、指導法や学習カードの工夫について検討を重ね、授業改善を図ることができた。 ・体育の授業でも児童相互の話し合い活動を取り入れ、表現力を高めることにつなげることができた。 ・全国や県の学力状況調査の結果については、全職員で分析し、具体的な対応策まで考え、実施することができた。 ・県の学力状況調査の12月結果では、4・5・6年生の全教科で全体的に県平均を上回っていた。 ・ノート指導や板書については、共通した指導が行われている。「めあて」の提示については、全職員が行っている。	・学校全体で体育の研究に向けて、共通理解を深めながら校内研究を進めてきたが、今後も教材研究を深めながら、授業の質を高めていく必要がある。 ・早い段階で、学習状況調査の分析を行い、結果の分析を元に、さらに幅広い指導力と指導法を研究・実践していく必要がある。特に「資料の読み取り」「理由を記述する」ことへの指導の充実が図られることが必要である。 ・昨年度まで取り組んできた算数科の「伝え合い活動(かいわタイム)」を他教科にも取り入れ生かしていきたい。 ・ノート指導や板書計画についても指導・実践の継続を図っていきたい。 ・全員が授業を公開し授業改善のための手立てが取られた。今後も教材研究を深めながら、授業の質を高めていく必要がある。
教育活動	○学校連携	・小中連携教育の推進 ・幼保小連携の強化	・小中三校の連携会議を年3回以上実施し、児童の中学校進学に対する不安を解消する。 ・参観や連携会議など、幼稚園や保育園との情報交換を年3回以上は行い連携を深める。	・成章中、神野小との合同授業研、出前授業等や夏休みに子ども向けワークショップを開催し、教師間・子ども間の連携を図る。 ・学期毎に小学校と校区内の幼保との連携会議を開催する。 ・新1年生の学級編制に、幼保からの情報を活用する。	A	・小小交流を通して、相互理解につなげることができた。 ・小中連携では、出前授業やワークショップでの交流等を通して、中学校生活への期待感を高めることができた。 ・年間計画に沿って、各学期ごとに幼保小連携会議を行い、1年生の生活や学習の様子や職員の相互参観などについて話し合った。 ・年長児の「学校体験」や「なりきり体験」を実施し、小学校へのなめらかな移行を目指した。 ・特別な配慮を要する新1年生については、聞き取りや参観を行い、新年度の学級編制に役立てた。	・小中連携に関しては、これまで実施してきた各取組を内容や開催時期を見直しながら実践して、スムーズな進学を目指す。 ・就学児に関しては、幼保小連携会議、相互参観等の機会を活用し情報収集を行いながら適切な連携を目指していきたい。
教育活動	◎教育の質の向上に向けたICT利活用教育の推進	・電子黒板の活用	・ICT利活用について校内研修を行い、全職員が効果的な活用の仕方を学ぶ。(年3回以上) ・全学級での電子黒板やタブレット型PCの効果的な活用の方法をさぐり、児童の学力向上に役立てていく。	・情報教育推進リーダーを中心に、校内での利活用についての推進を促す。全職員による計画的な研修を年3回行う。また、希望者によるミニ研修を随時行う。 ・各教科・領域において、児童の意欲を向上させたり理解を助けたりする手段の一つとして、ICT機器を活用した授業を1日1回以上行う。 ・デジタル教科書の効果的な活用方法について、研修を行う。	B	・研修会を開き、タブレットPCの利用方法について周知することができた。高学年は、教室で常時タブレットが使用できるように無線LANを設置し、研修会を行った。 ・毎日各クラスで、電子黒板を活用した授業が行われるようになり、児童の学習意欲の向上や基礎・基本の定着に効果が見られるようになった。体育の校内研究でもタブレットを使用し、児童が視覚的に自己振り返りができるようになった。 ・日常的に全職員が活用できていた。	・教室におけるタブレットPCの活用方法について研修を行い、さらに利用できるようにしていきたい。 ・教員のICT利活用のスキル差をなくしていくよう、日常的に情報交換ができるよう話題を提供していきたい。 ・他教科・領域での具体的な利活用について研修を行い、職員のスキル向上につなげていきたい。また、教室でタブレットが活用できるように研修を深めていきたい。
教育活動	・小学校低学年の学習環境の改善充実	・基本的な生活習慣の定着 ・学力向上 ・学習習慣と基礎・基本の定着	・学校生活のきまりや学習のきまりを定着させる。 ・国語科・算数科における基礎・基本の定着を図る。	・目標が達成できている児童を称賛し、他の児童の実践意欲を高める。 ・国語科や算数科の基礎・基本的なスキルを向上させるため、指導方法を工夫・改善する。 ・授業の終末や小単元ごとに小テストを行うなどして、基礎的・基本的学習内容の理解の様子を確かめる。 ・つまずきが見られる児童には個別に指導を行う。	A	・学校生活や学習のきまりを守ろうと努力している児童が増えてきた。 ・毎時間「めあて」を意識させ、「まとめ」「書く活動」「話し合う活動」「振り返り」を取り入れた授業を行ってきたことで、問題解決に積極的な姿勢が見られてきた。 ・チャレンジタイムで、計算力や漢字、言葉などの言語力の基礎・基本の定着が図られた。	・児童を称賛することで、意欲的に学習に取り組み落ち着いた学校生活を送っている。学習内容の定着には個人差が見られる。定着が十分ではない児童については個別指導や繰り返し学習などを行って対応していく。生活のきまりについては、個や発達段階に応じた伝え方で繰り返し指導を行う必要がある。 ・漢字や計算の小テストを行うことで、つまずきを見つけ対応することができた。チャレンジタイムでは計算力や言語力の定着を目標に努めてきたが、その内容については、再考していきたい。
② 豊かな心の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	・学校経営方針	・学校教育目標および経営ビジョンの周知	・保護者の周知率を95%、児童の周知率を85%とする。	・学校だより、ホームページ、PTA総会、学級懇談会、地域ふれあい協議会などを通じて保護者や地域に知らせる。 ・「勸興魂」を合言葉として、全校朝会等で児童への周知・定着を図る。	A	・学校教育目標等の周知率は保護者が98.8%、児童が97.8%と目標を達成できた。昨年度と比べて、保護者は+3ポイント、児童は-1.6ポイントとなっているが、「勸興魂」の合い言葉が広く周知されてきている。現状を維持できるように、更に周知徹底等を工夫する必要がある。	・来年度は、保護者・児童の周知率が100%なるようにしていきたい。そこで、児童と保護者にも具体的な行動目標としての周知をはかりたい。そのために、全職員が、たよりや集会・朝会等でおりにふれて行動目標を提示するようしていきたい。

教育活動	●心の教育	・道徳教育の充実 ・人権・同和教育の充実 ・異年齢集団による活動の深化	・道徳の時間の充実や体験活動・ボランティア活動等への取り組みを通して、豊かな心を育む。 ・地域や保護者の方に道徳の授業を公開する。 ・気持ちのよいあいさつができている子どもを80%以上とする。 ・異年齢集団活動「はと活動」で、互いを思いやる気持ちを育む。	・年間計画を見直し、「わたしたちの道徳」と関連づけた授業を行っている。 ・地域や学校で行う体験活動と道徳の時間との関連を図った授業を行う。 ・授業参観やフリー参観デーの時に、「ふれあい道徳」の授業を年1回以上公開する。 ・声の大きさ、場に応じた挨拶という視点であいさつ運動を進める。 ・ひびきあいタイムの計画的運用を行う。 ・共遊の時間において、反省の時間を確保し、活動を振り返らせる。	A	・フリー参観デー等に、地域や保護者の方にふれあい道徳の授業を公開することができた。 ・あいさつについての児童アンケートにより、自分から進んであいさつができたと回答した児童は目標の80%以上となり目標は達成できた。 ・「ひびきあいタイム」では、職員による劇や絵本の読み聞かせなどを通して児童人権に対する意識を高める取り組みの一つになった。 ・共遊の時間「はと活動」の時間を確保し、リーダーが中心となり実施し、毎回、短時間ではあるが活動のふりかえりができた。 ・佐賀市人権・同和教育研究会の授業実践交流会で公開授業を行い、授業研究会では参観者と協議を深めることができた。	・道徳の教科化に向けて年間計画の見直しを図り、「わたしたちの道徳」を関連づけ、さらに充実した道徳の授業を行っている。 ・自分から進んであいさつをしていると答えた児童は88.3%と目標達成はできたが、昨年の達成率より低い結果であった。来年度はひびきあい部を中心に新たな取り組み考えていきたい。 ・ひびきあいタイムの計画的運用(学年や学級の時間の確保)や特別支援学級との交流など今後も継続して取り組んでいく。
教育活動	●いじめの問題への対応	・いじめ防止等の体制の構築 ・いじめに対する共通理解と取り組むための共通認識の獲得 ・いじめの未然防止 ・いじめの早期発見 ・いじめに対する早期対応	・いじめ防止対策の啓発を行う。 ・「いじめ・命を考える日(毎月1日)」を中心に据えて、児童の人権意識を高める。 ・「いじめ問題」に関する校内研修を行い、職員の人権意識を高め、実践力をつける。	・「いじめ防止対策委員会」並びに「拡大委員会」を年2回開催する。 ・毎月1回いじめ・いのちアンケートを実施し、担任、管理職が目を通し、記述内容に応じて児童や保護者への聞き取りを行い、いじめの早期発見・早期対応に努める。 ・全校朝会や学年朝会等で、「いじめ問題」に関する指導を行う。 ・毎週木曜日に、児童について共通理解する時間を設定する。 ・QUTテストを実施し、児童や学級の様子を把握する。 ・外部専門機関との連携を図る。	C	・「いじめ防止対策委員会」並びに「拡大委員会」を年2回開催し、いじめに対する早期対応を行うことができた。 ・毎月、いじめ・いのちアンケート(保護者向け)やなかよしアンケート(児童向け)を行い、児童や保護者から得た情報をもとに、気になる事案については早期に対応することができた。 ・毎学期の始業式では『いじめ0のやくそく』～レインボーさくせんを行い、校内放送などでも適宜いじめを根絶する啓発を行うことができた。 ・毎週木曜日には、児童の情報交換会を行い、気になる児童については学年を越えて共通理解をすることができた。 ・QUTテストの活用法についての校内研修を行い、学級経営に活かすことができた。 ・弁護士の方を招き、6年生に対していじめ防止の授業を実施することができた。	・いじめにつながる恐れのある行為は、些細なことでも生徒指導担当に報告し、職員が連携しながら早期対応できるシステムを確立する。 ・専門家を招いての児童に対する講話は、今後も継続的に行っていく。 ・なかよしアンケート(児童向け)に書かない児童がいることを想定して、個別に面談を実施したり、教育相談を周知したりして未然防止に努める。 ・不登校傾向にある児童について、学習支援員やSSWと連携した支援についても考慮していく必要がある。
教育活動	・開かれた学校づくり	・地域社会、保護者との連携	・行事の共催を通して相互交流を密にする。 ・各学年で少なくとも1単元は地域に密着した総合的な学習の時間や、地域教材・地域人材を活用した活動を実践する。	・学校と地域合同のふれあい運動会を開催する。 ・勤興まつりや公民館との合同行事を推進する。 ・総合的な学習の時間では、年間の指導について詳細な計画のもと地域学習の展開を図る。	A	・地域の方とふれあい協議会後の話し合いを通して、運動会の内容について共通理解を図った。本番では、地域の方と児童が協力して運動会を運営することができた。 ・勤興まつりについても、公民館やふれあい協議会の皆様と協力してまつりの企画・運営を行うことができた。 ・総合的な学習の時間等では、地域の方をゲストティーチャーとして招き、専門的な指導を受けることで、児童が意欲的に学習することができた。	・学校、保護者、地域との話し合いを一層綿密に行い、詳細な放送原稿や役割分担等を具体的に決めておくとともに地域が一带となる運動会や勤興まつりにできると考える。 ・総合的な学習の時間をより充実したものにするためには、担任とゲストティーチャーとの打ち合わせ等の時間をどのように確保するかが課題である。そのためには、年間の指導について詳細な計画が必要である。

③ 特別支援教育の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○特別支援教育	・個別支援が必要な児童への支援体制の確立 ・特別支援教育の充実	・支援を要する全ての児童の個別の支援計画を作成する。 ・職員間で積極的に情報交換を行い、支援の方法を探る。 ・教職員全員が、特別支援教育に関する知識を身につけ、適切な対応について共通理解する。 ・児童・保護者に対して啓発を行う。	・特別な支援を要する児童の個別の支援計画を作成し、木曜日の情報交換会の時間に記入したり、情報を共有したりする。 ・校内教育支援委員会を必要に応じて開催する。 ・特別支援教育の研修会を年間を通して計画的に位置付け、最新の情報を得たり、適切な対応について共通理解したりする。 ・「ふれあい給食」や「カレンダー作り」、「勤興ゆうびん局」等を通して児童に啓発を行う。 ・特別支援教育の推進のために、PTA総会や新入学説明会等で説明をしたり便りを保護者に配布したりして、保護者への啓発に努める。	A	・毎週木曜日に情報交換会を位置づけ、要支援児童の記録の時間をとり、情報を共有しながら、支援方法についての話し合いを行った。 ・各学級担任が年2回、共通のチェックシートを実施することで、児童の実態把握や変容、支援の方向性を見極め、支援に役立てることができた。 ・必要に応じて、校内支援委員会等を開き、支援方法や支援体制を考えたり専門機関との連携をとったりした。 ・定期的に職員研修を行い、全職員の共通理解を図り、特別支援教育に関する意識を高めることができた。 ・「1年生との交流会・ふれあい給食・勤興ゆうびん局・カレンダー作りと配布」等の活動を通して、特別支援学級の児童と全校児童との交流活動を継続的に実施することができた。「勤興ゆうびん局」では、特別支援学級宛に感謝の手紙を送ってきた児童もあった。	・特別支援教育研修会を開き、担当者の資質向上を目指し、指導支援の方法や自立活動の進め方等についての研修を深めていきたい。 ・これからも必要に応じて専門機関との連携をとり、さらによりよい支援ができるようにしていきたい。 ・新入学説明会などの機会をとらえて「特別支援学級や通級指導教室」の保護者への啓発を行っているが、今後も引き続き学校だよりを利用したり、新たにPTA講演会などを活用したりして、啓発活動を考えて多様化していく必要がある。 ・1年生との交流会、ふれあい給食、勤興ゆうびん局、カレンダー作りと配布は引き続き行い、特別支援学級児童と全校児童との交流を図りたい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	●健康・体づくり	・運動に親しむ習慣の育成 ・望ましい食習慣の育成	・毎日進んで体を動かそうとする児童を育てる。 ・朝食をとって登校する児童の割合を95%以上とする。	・月に1回程のペースで「勤興体操」を行う。 ・「なわとび」や「ボール遊び」、「一輪車」などに挑戦させ、外遊びを奨励する。 ・「なわとび」「球技」などの大会を企画する。 ・「保健便り」や「給食便り」等を通して早寝・早起き・朝ご飯の啓発を進める。 ・学校栄養職員や養護教諭との連携を図り、学級活動や教科指導などで食の大切さや健康についての意識向上を図る。	B	・「勤興体操」を月に一度行った。短い時間ではあるが、全校で体を動かすことができた。 ・体育外部講師派遣事業により、体づくり運動の授業を中心に外部指導者に入っていた。外部指導者と協力して授業を行い、児童も楽しく学習する様子が見られた。 ・「保健だより」や「給食だより」を発行し、学校栄養職員や養護教諭と各担任が連携して授業を実施するなどして、健康的な生活習慣の確立に向けての啓発を行うことができた。 ・朝食をとっている児童は95.6%と目標を達成できた。	・本校の伝統である「勤興体操」は年間計画に位置づけ継続的に実施する。 ・体育の学習で行っている体づくり運動に児童が自ら取り組み親しむことができるように環境の整備を行う。 ・学校栄養職員や養護教諭と連携した食育・健康教育・性教育等の授業実践に積極的に取り組む。 ・朝食については、目標は達成しているものの、昨年度より低い値となっているため、継続的に朝食の重要性を児童や保護者に知らせていきたい。

4 本年度のまとめ ・ 次年度の取組

◇学校の教育活動について、今年度も学校だよりやホームページ、PTA総会、地域のふれあい協議会など、機会あるごとに具体的な取組みや手立てを紹介してきた。その結果、地域や保護者の学校に対する理解と協力を得ることができている。

◇本校の教育の特徴の一つである複数担任制をいかし、担任が協働して児童を多面的に見取り、指導を行うことができている。

◇学力向上のために、佐賀県及び全国学力・学習状況調査の結果を全職員で分析し、年間を通して、4、5、6年生だけでなく、全学年での学習指導に力を入れてきた。校内研究で体育科を中心に「できる」「分かる」「かかわる」を意識した授業づくりを行った。体づくり運動に取組みながら、自然にかかわりあう合う姿が見られ、学習意欲の向上へとつながった。「チャレンジタイム」を全学年、「すくすくテスト」を4年生以上で実施することにより、基礎学力の定着を図ることができた。

◇情報教育コーディネーターを中心に、ICT利活用に関する校内研修会やミニ研修会を計画的に行い、全学年に導入された電子黒板の活用の充実を図った。そのことにより、「わかる授業」はもちろん、児童の学習意欲の向上や学習内容の定着が図られた。

◇毎週木曜日に、全職員が児童について情報交換をする時間を確保し、共通理解をすることができた。毎月、いじめアンケートを実施し、気になる事案については本人への聞き取りや保護者への連絡を通して早期対応を行い、心豊かな児童の育成といじめのない学級づくりの実現に努めた。

◇地域や保護者と連携した教育活動については、保護者、職員共に肯定的で、地域ぐるみで児童を育てているとの意識が高い。また、児童も連携した行事や活動を楽しみにしており、学校や地域を愛する心が育っている。

◇学校栄養職員や養護教諭と連携しながら、食の大切さや健康に関する指導の充実を図ることができた。

◆基礎学力の定着、思考力・活用力の一層の向上と、対話的に運動を楽しむとする児童を育成するため、指導方法・教材の開発等の工夫改善に来年度も真摯に取り組んでいく。また、学級担任と研究主任や指導方法改善担当との連携をより有効に機能させ、個に応じたきめ細やかな学習をいっそう進めていきたい。

◆図書館の貸出数の目標設定について職員の理解を深め、読書ボランティアの活用、読書活動を生かした心の教育など、図書館教育を一層推進していきたい。

◆特別支援教育のさらなる推進のため、特別支援学級特別支援教育に関して専門機関との連携をとり、さらによりよい支援体制が構築できるように工夫していきたい。特別支援学級児童と全校児童との交流をこれまで実施してきた様々な取組みを継続して推進していきたい。特別支援教育についての啓発活動にも引き続き取り組んでいきたい。

◆来年度もICT利活用による効果的な授業のあり方、デジタル教科書の効果的な活用方法についての研修をさらに進めていきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目